

## インターンを通じた中山間地域での若者の受入の成果と課題

誌名	農村計画学会誌 = Journal of Rural Planning Association
ISSN	09129731
著者	金子, 知也
巻/号	35巻1号
掲載ページ	p. 16-19
発行年月	2016年6月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



# インターンを通じた中山間地域での若者の受入の成果と課題

— I ターン留学『にいがたイナカレッジ』の取組から—

Achievements and Problems of the Acceptance of Young People to Local Areas through the Intern

金子 知也\*

Tomoya KANEKO

## 1 はじめに

新潟県中越地方の中山間地域では、2004年に発生した中越地震が引き金となり、それまで緩やかに進んでいた過疎化の流れが一挙に進んだ。被害の大きかった地域では、人口減少が20年加速したと言われ、担い手不足という課題が目の前に突き付けられた。

このため、(公社)中越防災安全推進機構では、新潟県中越大震災復興計画の考え方にもとづき、2012年度から、一定期間、都市などから外部人材を受け入れ、過疎化が進む中山間地域の活性化を図る担い手対策として、「Iターン留学『にいがたイナカレッジ』」事業を開始した。

中越地域の各集落・地域では、震災をきっかけにボランティアや専門家、大学・学生などの外部支援者との交流が活発となり、その後もグリーン・ツーリズムなどの事業を通じて、都市住民や大学生などを数日～数週間受け入れる取組が行われてきた。そういった意味では、地域外の人を受け入れることに慣れている集落・地域が多いのが中越地域の特徴とも言える。

しかし、本事業のように最低でも数週間～1か月、最長で1年もの間、地域外の人材を受け入れることは全くの初めてという集落・地域がほとんどで、そういった意味では、本事業は中越地域の集落・地域にとって、試行的な取組としてスタートした。

本稿では、Iターン留学『にいがたイナカレッジ』として実施してきた4年間の活動を振り返り、これまでに見えてきた成果や課題等を整理しつつ、中山間地域の担い手対策という側面から、インターンシップ事業を通じた若者の受入のあり方を考える一助としたい。

## 2 Iターン留学『にいがたイナカレッジ』の概要

### (1) プログラムの概要

Iターン留学『にいがたイナカレッジ』は、中越地域の中山間地域を舞台に、地域の現場に移り住み、中山間

地域で自分にあったライフスタイルを見つける・創り上げていくインターンシップ・プログラムである。具体的には、「地域づくり・地域マネジメント」「六次産業、コミュニティ・ビジネス」「半農半X・ムラの暮らし」などを学ぶ。中山間地域に入るきっかけづくりを目的とした短期プログラム(数週間～1か月)と、腰を据えて本格的に学ぶ長期プログラム(1年間)の2種類から成る。

本事業は、中越大震災復興基金を財源とし、参加期間中の滞在費(家賃、光熱費、車両費等)は、受入地域が負担し、その一部を同基金が補助する。さらに長期プログラム参加者には、生活費補助として同基金から5万円/月が支給される。

### (2) 参加者の属性

これまでの参加者数の推移をみると、長期プログラムは定員8名/年に対し、事業開始2年目までは定員を満たすことができなかったが、各種情報発信・PR活動などが身を結び、3年目からは8名の参加者を確保している。このうち、休学中の大学生など、毎年1～2名の学生の参加が見られる。

短期プログラムについては、年によって実施規模が異なるが、参加者の約半数を学生が占めている。

表1 インターン参加者の属性

	長期プログラム (1年)		短期プログラム (数週間～1か月)	
	参加者	うち学生	参加者	うち学生
平成24年度	4人	2人	6人	4人
平成25年度	4人	1人	17人	8人
平成26年度	8人	1人	4人	3人
平成27年度	8人	1人	7人	5人

### 3 学生参加者の活動事例

集落のアイドルとなった女子大生・五味希(ごみ のぞみ)さん

五味さんは都内の大学院を休学して、2012年8月か

\*公益社団法人 中越防災安全推進機構 Chuetsu Organization for Safe and Secure Society

Keywords: 1) イナカレッジ, 2) インターンシップ, 3) 中山間地域の担い手, 4) 移住, 5) テーマ設定型・課題解決型インターン

ら1年間小千谷市の東山地区でお世話になった。大学院では地域づくりを専攻し、「実際に地域で暮らし、住民の人たちと関わりながら地域づくり活動を学びたい」というのが彼女の参加動機であった。

東山地区は中越地震で大きく被災した地域の一つ。五味さんは、地域活性を担う東山地区振興協議会の一員として、地域住民に対するアンケート調査「これからの東山アンケート」やヒアリングなどを行い、1年間の活動成果として、冊子「ひがしやま探訪～東山のこれまで・いま・これから～」を取りまとめた。このほか、毎月発行する地域情報紙「東山月報」の取材・編集・発行、高齢者サロンの運営、闘牛や直売所などを手伝うほか、田んぼを借り、集落人たちのサポートを受けながら「希の田んぼ」で米づくりも行った。また彼女は、中山間地域に移住してきた女性達と一緒に、“移住女子”を結成し、クラウドファンディングを活用して、中山間地域の魅力を伝えるフリーペーパー「ChuClu」の発行にも取り組んだ。いつも笑顔を絶やさないう五味さんは、地域のアイドルと化した。彼女が住む東山地区塩谷集落は、豪雪の中越地域のなかでもさらに雪深い集落。雪掘りや雪下ろしの際には、集落の人たちが彼女の家に駆けつけた。

彼女は1年間のインターンシップを終え大学院に復学・卒業し都内で就職したが、インターン修了から3年経った今も、集落の人たちと一緒に「希の田んぼ」で米づくりを行い東山に通い続け、また集落の人たちも彼女が来ることを毎回楽しみにしている。

#### 4 長期プログラムの取組成果

##### (1) インターン生のその後

###### 《地域に定住する》

長期プログラムでは、3年目の2014年度からは、インターン修了後に定住を望む人たちが多く見られるようになった(2014年度:参加者8名のうち7名が定住、2015年度:参加者8名のうち5名が定住)。定住にあたっての仕事としては、NPOや農業生産法人への就職、新規就農、様々な仕事を組み合わせて個人事業主として独立する人など様々である。

ただ共通して言えるのは、インターン生たちは、1年間という時間の中でたくさんの地域の魅力を感じ、自分もその一員として地域に居続けることを決意している。そして、定住を決意した人たちは、1年かけて作った地域の人たちとのつながりの中から仕事を紹介してもらったり、生業づくりにあたっての経営資源を獲得している。つまりハローワークなどで求人を探すのではなく、1年かけて勝ち取った“地域の信頼”のなかから食い扶持を見つけていくのである。

###### 《都市に戻っても地域の担い手として活躍》

インターンシップ事業では、都市農村交流(グリーン・ツーリズム)と比べ、より地域の暮らしに入り込み、濃密な時間を地域の人たちと過ごすことができる。一緒に汗を流し、苦楽を共にし、まるで家族のような関係性が育まれる。

インターン期間が終わっても、地域の行事やイベント、農作業の手伝いなどに訪れる人が多く見られ、なかにはインターン修了後に就職した都内のカフェで、お世話になった地域の特産品をメニューとして提供する人もいる。地域に住んでなくても、地域のサポーター・担い手として彼らは活躍している。

###### 《インターンの経験を活かして次のステップに》

インターン期間中は、中山間地域で様々な活動を経験する。インターン修了後に小学校の先生となってその経験を子ども達に伝える人、他地域の地域おこし協力隊になった人など、中山間地域で体験したこと・感じたことを糧に、次のステップに役立てている。キャリアアップとして、インターンでの経験が活かされている。

##### (2) 受け入れた地域の変化

###### 《「明るくなった」という地域住民の声》

インターン生を受け入れたある地域住民からは、「これまで農作業は、一人で黙々とうつ向きになりながらやっていた。インターン生が来たことで色んなことを教えながら作業をして、視線が上向きになった。」との感想が挙げられた。また、インターン生が地域に入ったことで、「道の草刈りなど、集落の景観が明らかにきれいになった。それによって外の人を受け入れながら活動することの大切さが集落の中で共通認識になった。」等の声がある。

若者が地域に入ることで、「雰囲気明るくなった」という声が多く聞かれ、そこに暮らす人々の中に、前向きな気持ちの変化が生れている。

###### 《インターン生がハブとなる“つながり効果”》

地域や集落のなかに、外から若者が入ることで、たくさんの方が“世話焼き”をしてくれる。特に何も知らない若者を受け入れた地域ほど“世話焼き”は手厚くなる傾向にある。ある地域では、インターン生の世話をするために、「地域内での話し合いの場が増えた。」と言う。また「今までつながりの少なかった団体・集落同士の連携が生まれた。」など、インターン生がハブとなって、地域のなかで様々な“つながり効果”が生まれている。

###### 《「うちでも受け入れたい」という地域の増加》

1年もの長い期間、地域外の人を受け入れるということは、地域にとってもハードルが高いものである。しかし実際にインターン生を受け入れている地域を見た別の地域の人たちからは、「あんな子が来てくれるなら、来

年はうちでもやってみたい。」そんな声をたくさんいただくようになった。現在は、募集するインターン生の定員以上に“受け入れたい”という地域の数の方が上回っている状況である。ある地域では、80代のじいちゃん・ばあちゃんが普通に「インターン」という言葉を発する。インターンを通じた若者の受入が中越地域のなかで浸透してきている。

#### 5 長期プログラム実施にあたってのポイント

私たちが長期プログラムを実施するなかで最も注力している点は、インターン生と地域の人たちとの“関係性づくり”である。このような事業に取り組んでいると、よく「移住対策」として見られがちだが、私たちは、移住というのはあくまでもインターンが終わった結果としてついてくるものであり、それを最初から目的としては掲げない。これまでの4年間の取組を振り返り、長期プログラム実施にあたってのポイントを整理する。

##### (1) “教える×学ぶ”の関係性

イナカレッジのインターンシップ事業は地域の人たちが先生となり、その中でインターン生に地域で生きる“チエ”や“ワザ”を教えることを通じて、インターン生は地域の“ヒト”や“暮らし”の魅力を感じていく。受入にあたっては人材育成という視点で、インターン生としてやってくる若者に色々なことを“教える”ことに注力いただくことを受入地域の人たちにお願ひし、また地域の人たちも“教える”ことを通じて、誇りを取り戻していくように感じる。私たちは、地域の人たちの“教える”と、来た若者の“学ぶ”姿勢・立ち位置を予め明確にすることで、地域と若者の良い関係性づくりに努めている。

##### (2) 1対大勢の受入態勢

地域の人たちとインターン生の関係づくりのなかで重要な要素となるのが、大勢での受入態勢である。もともとは、弟子入りのようなかたちで実施していた長期プログラムもあったが、常に1対1で向き合うと距離感が近くなり過ぎ、徐々にお互いが疲れ長続きしない。できるだけ“地域ぐるみ”でインターン生を受け入れることによって、活動のシェア、インターン生と受入地域の人たちとの程よい距離感、そして何よりもインターン生の付き合いの広がりにもつながる。イナカレッジの長期プログラムの受入にあたっては、個人での受入は不可としている。できるだけ多様な人たちからインターン生に関わっていただき、1対大勢で受け入れることを実施の条件としている。

#### 6 短期プログラムの課題と改善

##### (1) 失敗を経験して『テーマ設定型・課題解決型インターン』へシフト

長期プログラムは、期間が長い分、インターン生および受入地域のそれぞれの要望を聞きながら、インターン期間中に臨機応変にプログラムを微修正するなど、“やりながら修正”することができる。そのためインターン生にとっても、受入地域にとっても満足度の高いプログラムをコーディネートしやすいという利点がある。

一方、短期プログラムは、数週間～1か月間と期間が定められているため、“やりながら修正”することが難しい。そのため、いかに事前のプログラム設計や受入地域との調整などの準備が出来ているかが重要となってくる。

イナカレッジでは過去に、農業や農村文化に触れあう短期の“体験型インターンシップ”を実施してきた経緯がある。また新潟県内では、イナカレッジ以外にも、地域の課題発見・取組提案を目的とするインターンシップ事業なども行われている。これらの短期プログラムの実施を通じて、「若者が来て楽しい」「明るくなった」など受入地域から前向きな評価が挙げられる一方で、以下のような課題も挙げられた。

##### 【農作業体験型インターンの場合】

(受入地域の声) 数週間、農作業を手伝ってもらっても、作業に慣れた頃にインターンが終わってしまう。受入側として、疲労感や徒労感の方が大きい。

(参加者の声) ひたすら農作業の手伝いで、これならバイトと変わらない。わざわざ新潟に来て参加する意味があったのか？

##### 【調査・提案型インターンの場合】

(受入地域の声) 色々とインターン生から提案をもらったが、地域の実態に即さない。誰がやるのか。

(参加者の声) 色々と地域に提案したのに、何も実行されない。自分たちの役割は何だったのか？ どういう目的でインターンを受け入れたのか？

このようなことが起こる背景には、インターンシップの捉え方が人によってバラバラで、受入側・参加側双方のねらいのミスマッチ、プログラム設計、参加者と地域を結ぶコーディネーターの機能不全など、様々な要因があげられる。

これらの教訓を踏まえ、イナカレッジでは、地域にとって意味があり、且つインターン生にとっても学びの多い、win-winのプログラムを構築するため、短期プログラムの実施にあたっては、これまでの“体験型インターンシップ”とは異なる『テーマ設定型・課題解決型インターンシップ』へと切り替えた。

今一度私たちが考える『テーマ設定型・課題解決型インターンシップ』を整理すると、

- ・単なる労働力の提供・受入、お手伝いではない。
- ・目的・1か月後の到達目標が明確で、インターン期間

中にそこに到達するロードマップが設定されている。  
・これらを受入側とコーディネーターが共有できている。

これによって、受入側としてはインターン生に何のためにどのようなことをやってもらうのかを明確化し、その後の地域づくり活動等に活用できるものになるほか、インターン生にとっても到達目標が見えていることで、参加の意義や達成感が得られる。

特にプログラム設計にあたっては、参加するインターン生に、期間中に「なんとか達成できる」ハードルを設定し、インターン生が「ひと皮むける経験」があることなど、成長につながるポイントが求められる。

至極あたり前のことではあるが、これらのことを実行できているプログラムは、少なくとも新潟県内では非常に少ないのが現状である。

(2) 『テーマ設定型・課題解決型インターン』の活動例  
～女子大生5人娘による温泉旅館の宿泊プランづくり  
2004年の中越地震により甚大な被害を受けた長岡市蓬平温泉の旅館3館をフィールドに、右肩下がりとなっている観光客数を食い止めるため、新たな顧客層の開拓に向けた若者向けの宿泊プランを企画・立案するインターンシップ『越後新潟の歴史ある温泉地で、顧客満足度No.1の宿泊プラン作成プロジェクト』を実施した。同インターンには、首都圏で観光やマーケティングなどを学ぶ女子大生5人が参加し、2016年2月から6週間のプログラムとしてスタートした。

旅館業の仕事を理解するため、5人の女子大生はまず仲居となり、旅館での各種業務、従業員との関係性づくりからスタートし、2週目には専門家による旅行業会や宿泊プラン作成のポイントなどについての研修、さらには蓬平地域のイベント等への参加、3週目からは仲居としての仕事を行いながら、地域内にある観光資源の調査、3館の旅館の従業員などとのワークショップを行った。最終的には3館の女将に対して自分たちで考えたプランをプレゼンテーションした。参加した女子大生は異口同音に、「学校では得られない、実践的な経験が出来た」とするほか、いずれも蓬平地域のファンとなった。女子大生5人によって作成された「若者向けの宿泊プラン」は、既に一部旅館で実行に移され、2016年夏に再び5人の女子大生が蓬平温泉を訪れ、プランのブラッシュアップ作業を行い、2017年1月から本格的に始動する予定となっている。また、副次的な効果として、彼女たちの呼びかけで実施したワークショップを機に、それまであまりつながりのなかった3館の若手従業員の定期的な話し合いの場が生まれるなどの成果が挙げられた。

(3) 本格的な学生インターンのスタート

イナカレッジでは、これまでの経験を踏まえながら、

2016年度夏から学生を対象とした本格的な『テーマ設定型・課題解決型』短期インターンシップをスタートする。

本プログラムは、集落・地域が取り組む地域づくり活動のなかで、具体的なテーマや課題を設定し、ミッションを達成していく「地域デザインコース」、さらに地域の中で頑張る中小企業が抱えている課題の解決や新規事業の立ち上げに向けた市場調査などを実践する「ビジネスデザインコース」の2種類から構成される。受入側が地域なのか企業なのかで、プログラム設計のポイントも異なる。例えば企業でのインターンの場合、経営者が抱く会社の将来像や夢を語っていただき、それを実現するにあたって、現在何が不足しているのかという視点でプログラムを設計していく。一方、受入が地域の場合、住民の気持ちは人それぞれで、望む将来像も多様である。そのため、プログラム設計にあたっては、普段から地域づくり活動等を通じて接しているコーディネーターが、「その地域にどのような化学変化を起こしたいのか」という視点が非常に重要になってくる。

イナカレッジでは、この夏の学生インターンの実績や教訓を踏まえ、今後のインターンシップ事業に波及させていきたいと考えている。

## 7 おわりに

過疎化が進む中山間地域では、“担い手の確保・育成”が大きな課題である。最近では“地方創生”の旗印のもとに、各地でIターン者やUターン者を増やしていこうとする動きが見られるようになった。移住というと必ず“仕事”と“家”をどう確保するかが議論になる。

しかし、イナカレッジのインターンシップ事業を通して見えてくるのは、中山間地域においては、仕事や家について議論する前に、まず地域の人とインターンで訪れる若者が、いかに“良い関係”を築くことができるかが大切であること。“仕事”や“家”は暮らすための手段であって、若者が中山間地域への移住を決断する理由のほとんどが、“ヒト”や“暮らし”“生き方”に共感したり、魅力を感じるからである。そういった意味で人の魅力や暮らしの魅力を感じてもらうためには、しっかりとその地域に溶け込むことが何よりも重要であると考えている。

また、必ずしも定住だけが中山間地域の担い手ではなく、地域に通って農作業や行事を手伝ったりする人も立派な担い手となっている。中山間地域にはさまざまな関わり方と関わる人がいる、そんな“多様性”がこれからの担い手づくりに求められるのではないかと考える。

## 参考文献

- 1) 稲垣文彦ほか(2014)『震災復興が語る農山村再生』コモンズ、東京。